

# 東洋ライス

2

1945年、当時11歳だった東洋ライス社長の雑賀 慶二は川魚を捕るのを日課としていた。父は精米機の販売・修理業を営んでいたが、空襲で家などが焼失して打ちひしがれていた。腹の足しにしようと必死だった。



**1升から精米**  
49年に中学校を卒業し、細々と続いていた家業の手伝いを始めた。そして、精米機を仕入れられないほど

## 「なりきり」発想、開発の原点

### 顧客の不便を解消



の借金があることを知って、機械修理だけでは返済が追いつかない。雑賀は顧客の

石抜き機の発表会には全国の米屋などが集まった

▲……………客の立場で考えた。ふと浮かんだのが精米の不便さだった。

当時の精米機はある程度の量でないと精米できなかつた。だがコメは配給制。米屋に少量のコメを持つて

「なんだもの、「何百年も解

「そんなことをしている場合か」と反対したが、行列

上がった。精米機の販売を再開できる基盤が整った。

#### 石粒を自動分離

10年後、販売と修理で顧客を訪問する日々。複数の顧客から「コメに石粒が混ざっており、間違えて食べ

#### 売れると確信

初号機を米屋に持っていった。米屋は手作業で石粒を取り除いたコメを持ってきて「出るはずがない」と鼻で笑って機械に流し込んだ。次々に石粒がこぼれると「これを置いていけ！」と真剣な表情になった。売れると確信した瞬間だった。

61年に東洋ライスの前身、東洋精米機製作所を設立し、兄の和男が社長に就任。「自分は開発に専念したい」。63年に雑賀技術研究所を立ち上げて会長に就任した。ついに、お米の総合メーカーへの第一歩を踏み出した。(敬称略)

無断転載・複写禁止 (株)日刊工業新聞社